

『アパートの鍵貸します』の中に見る

合理主義と物質主義の行き過ぎ

外国語学部 英語英文学科4年 竹田 真理子

第一章 作品背景

第一節 1950年代のアメリカについて

アメリカは第二次世界大戦後、自国が戦場にならなかった事もあって急激に発展した。車やテレビ、洗濯機、冷蔵庫などが普及して人々の生活水準は格段に上がり、郊外も出現した。当時のアメリカでの模範的な家族像は、郊外に庭付きの一軒家を持ち、何でも知っている父親と優しい母親、言う事を聞く子供達が生活しており、休日には車で出かける家族だ。豊かなアメリカ、Pax Americana（パックス・アメリカナ）という言葉がそれを象徴している。

生活が豊かになる一方で、人々はソビエト（現在のロシア）の脅威に怯えていた。当時資本主義を唱えていたアメリカは、共産主義を唱えるソビエトと冷戦状態にあり、その対立は世界中を巻き込んだ。アメリカ人は冷戦の間中、ソビエトが爆弾を落としてくるのではないかと不安な日々を過ごしていた。更に、ソビエトの味方をするような発言をすると、非国民と見なされて赤狩り（マッカーシズム）の標的にされたのだった。

はじめに

何事においても行き過ぎは良くないし、物事には限度がある。それが合理主義や物質主義ならばなおさらだ。今から40年以上昔のアメリカで、この二つの行き過ぎを批判した映画がある。1960年に公開された、ビリー・ワイルダー監督の『アパートの鍵貸します』（原題『The Apartment』）だ。

『アパートの鍵貸します』では、物語の主要人物達の勤める会社を通して、当時のアメリカ社会の一部を垣間見る事が出来る。その中でも特に注目したいのが、合理主義と物質主義の行き過ぎだ。合理主義とは無駄を減らして物事を効率的にする事で、物質主義とは精神的なものを無視して、衣食住などの問題を第一に考える

事である。

合理主義と物質主義は厳密に言えばそれぞれ異なる意味だが、発生した過程を考えればその二つはとても似通っている。戦後のアメリカが経済的に急激に発展したのは、合理主義と物質主義を推し進めた成果と言えるだろう。しかしアメリカはこの二つに更に磨きをかけ、更なる向上を目指したのだった。それが良い事か悪い事かは個人の判断だが、本作品はそれを判断するいい材料と言える。

本作品はコメディ映画らしく、笑いの中に風刺が効いている。私はその笑いの中にある合理主義及び物質主義に対する批判を読み取り、時代背景や文化と交えながら以下に論じようと思う。

第二節 ビリー・ワイルダー監督

ワイルダーはアメリカ人ではなく、オーストリアの出身だ。ウィーンの大学に入学するも4ヶ月で退学し、新聞社に入社し記者として働いていたが、映画の世界に魅せられてベルリンで映画界に入り、何作か共同脚本をこなした。しかしユダヤ人であった彼は、ヒトラー率いるナチの魔の手から逃れるべくフランスに渡り、その後にアメリカにやってきた。ワイルダーはアメリカにやってきた当初英語が不自由であったため共同で脚本を書いた。

ワイルダーは2002年95歳でこの世を去ったが、その間にオスカーにノミネートされた回数20回、6度のオスカー受賞を持つ。ちなみに『アパートの鍵貸します』では、アカデミー作品賞、アカデミー監督賞、アカデミー脚本賞を受賞した。1本の映画で1人が3つのオスカーを受賞したのは、最初で最後の事だ。

第二章 『アパートの鍵貸します』の中に見る

合理主義・物質主義

第一節 あらすじ

『アパートの鍵貸します』（原題『The Apartment』）は、上司に自分の部屋を貸しその見返りとして出世していくバクスター（ジャック・レモン）が主人公だ。上司達是不倫相手との情事のために彼の部屋を使い、時には急に上司に頼まれて家から出なくてはならない事も。そんなバクスターは、上司に“loyal, cooperative, resourceful”（字幕では「協力的」となっている）と評され、成り行きで部長にも部屋を貸す事になって管理職の座を得る。

エレベーターガールのフランに想いを寄せるバクスターは、普段からなるべくフランのエレベーターに乗るように努力し、積極的に話しかける。だがフランは上司達からも人気のある高嶺の花であり、気の優しい彼は中々彼女に想いを伝えられないでいた。

クリスマスイブの夜、バクスターは部長に部屋を貸す約束をしていたが、その昼間に部長の不倫相手が意中の人フランである事を知り落胆する。そして共に過ごす相手のいない寂しいク

リスマスイブの夜、バクスターはバーで知り合った女性（既婚者）を酒に酔った勢いで自分の部屋へ連れ込む。ところが、ベッドルームには睡眠薬を大量に飲んで死にかけているフランがいた。慌てて人の医者に助けを求めフランはなんとか一命を取り留めたが、完治するには2・3日かかると言われて、バクスターはフランを自分の家で介抱する事になる。部長との不倫の恋に傷ついたフランの心を、バクスターは持ち前の優しさで一生懸命に励ます。

フランが回復した後、バクスターはフランに告白しようとしていたが、なんと部長は妻に不倫がばれて離婚していた。部長はフランと結婚すると言い、フランの嬉しそうな様子を見て自分の気持ちを押し隠すバクスター。しかし、彼はもう二度と部長には鍵を貸さないと言い放ち、会社を辞めてしまう。最後になってバクスターの気持ちと優しさに気づいたフランは、部長とのデートの途中でバクスターのアパートへ行き、無事に二人は結ばれる。

第二節 巨大組織批判

主人公のバクスターが働く会社は色々な意味において巨大だ。空まで届きそうな程に高いビ

ルの中には大勢の社員がいて、ビル内には通勤ラッシュと帰宅ラッシュなるものが存在し、エレベーターが大変込み合う。そのため、社員をさばくために会社は階ごとに就業時間をずらしている。16基もあるエレベーターは常に稼働しており、電話を取り繋ぐ係りの女性達は、ひっきりなしに鳴る電話の受話器を機械的に処理してゆく。ちなみに彼女達の周辺には電話の回線が所狭しと溢れている。

主人公が働く19階の普通保険部では、広大な部屋の中に大量のデスクがきれいな列をなして並んでいる。同じ部署の人たちの名前を全員分覚えられるとはとても思えない。大量の平社員が全員同じようにコッコツと仕事をしている様子は機械を思わせる。真面目に仕事をしていないのは、上司に部屋を貸す曜日を変更できないかと電話でそこそ相談しているバクスターくらいだ。

ワイルダーが主要人物達の勤め先をここまで巨大な組織として描いたのは、アメリカが極端に合理主義・成果主義に走った事への批判だろう。立派な大企業を賛美する当時のアメリカ社会を批判すべく、上司に媚を売らなければ出世競争に勝てず、社内で何組もの不倫カップルが存在する大企業を物語の舞台に選んだのだ。

それを象徴しているシーンがある。フランと部長がクリスマススイブにプレゼントを交換するシーンだ。

「何を贈ろうかと迷ったよ。分からなくてね。この100ドルで…」

と言って、財布から取り出した100ドル紙幣をフランに渡す部長。

「：ワニ皮のバッグでも」

電車に乗って家族のもとへ帰ろうとする部長。

「お金も頂いた事だし…」

「何て言い草だ。安っぽくなるだろう」

「100ドルは安くないわ」

その後、我が子へのプレゼントをしつかりと抱えて部長は帰って行く。このシーンから、部長には人の心の一部が欠落している事がよく分かる。クリスマスプレゼントに現金を渡す部長からは、悪意は感じられない。それが問題だ。子供達にはプレゼントの小包を用意しているからまだマシとは言え、それはそれでかえってフランを悲しませただろう。

プレゼントというのは、もらって嬉しいものである。それは、何かを手に入れたという気持

第三節 数字に固執する登場人物

物語の登場人物は、とにかく細かい事にこだわっている。例えば、本作品はバクスターのナレーションから始まるのだが、そのセリフが興味深い。

1951年11月1日現在、ニューヨークの人口は804万2783人。横一列に並んだらタイムズスクエアからパキスタンのカラチに達する。僕が数字に強いのは保険会社勤めているからだ。本社の従業員は3万1259名。地方都市の人口より多い。僕は19階の普通保険部。保険料計算課、デスク861。名前は〇・〇・バクスター。通称バッド。入社して3年10ヶ月。週給94ドル70セント。

物語の最初から、神経質過ぎるほど細かい数字の連続だ。バクスターの個人的な意見は全く無く、事実だけを建設的に紹介しているセリフは、まるで全ては数字で説明できると言っているかのように感じる。

次に、頭の中が計算機になっているシーンを取り上げよう。

ちもそうだが、プレゼントをしてくれた人の好意が嬉しいのだと思う。どんなプレゼントを贈れば喜ぶのかと相手が考えてくれたのが幸せだし、自分のために時間とお金を割いてくれた事も嬉しい。ところが部長が選んだ「現金」というプレゼントには、人の心がこもっていない。「恋人にはクリスマスプレゼントを贈るものだから、贈りました」と言わんばかりの、形式上のプレゼントにしか見えない。もし反論すれば、プレゼントすれば何でもいいじゃないかという心の声が聞こえてきそう。恋人からそんなものをもらって嬉しいのは、部長と同じように合理主義や物質主義に麻痺してしまった人くらいだろう。

現金をプレゼントする人の理由は、恐らくこうだろう。「自分で好きなものを買った方が、気に入るかどうかわからないものを贈るよりも良い」。そこには、無駄が省けるといつた考えが根底にある。無駄を省くあまり、人の心を無視している（あるいは人の心が分からない）のだ。これこそ物質主義および合理主義が生み出した病気だと思う。

風邪を引いているバクスターとフランの会話だ。

「私、絶対に風邪を引かないの」

「本当に？ 医療保険部の調べでは、ニューヨークに住む20歳から50歳の人、平均して年に2.5回風邪を引く」

「申し訳ないわ」

「どうして？」

「私が風邪引かない分、誰かが5回も」

「そりゃ僕だ」

物事は足し算や引き算のように簡単ではないが、平均値の通りに計算すると誰かが5回風邪を引いていることになる。世の中は全て数字で表せるほど単純ではないのだが、ワイルダーらしい笑いの中に皮肉を盛り込んだセリフだ。

第四節 嬉しくないプレゼント

戦後のアメリカは物質主義に固執して大きく発展したが、物質以外大切なものを失ったのも確かだ。物質主義に執着して物を何よりも大切に考えるあまり、人の心を失ってしまったのだ。

第五節 TVディナー

さて、バクスターは料理上手だという設定だ。彼のキッチンにはテニスラケットがあつて、彼はそれをパスタの湯きりに使っている。この非常識なアイデアも便利さにこだわらずに姿を笑いに変えて批判している。そのテニスラケットはフランに手料理を振舞ったシーンで活躍してフランを元氣付けるのに役立った。しかしバクスターは、仕事帰りのシーンではTVディナーを食べている。

TVディナーとは、フローズンディナーとも呼ばれる冷凍食品の一種だ。普通の冷凍食品と違うのは、調理済みの夕食のセットを食器ごと販売している点である。オーブンか電子レンジで暖めるだけで食べられるので、バクスターのような独身男性にとっては強い味方だ。この公開されてから40年以上経った現在でも、アメリカでは欠かすことの出来ない冷凍食品の一つだ。TVディナーは、ハンバーガー、ピザと並んで、アメリカにおける合理主義の象徴の一つであると思う。食器ごと売っていてレンジでチンするだけなので、ものすごく時間の短縮になる。TVディナーという名前が付いたのも、テ

レビを見ながら作れるし食べられるからだ。実際に作品中でもバクスターはテレビを見ながら食べている。加えて、TVディナーには様々な栄養が配合されていて、カロリーや炭水化物などは押さえ気味に作られていてとてもヘルシー。とても合理的な食品だ。

第六節 メンチュになれ

普段上司が連れ込んでいる女性達は、全てバクスターが連れ込んでいると勘違いしている隣人達。フランが部長との恋に絶望して睡眠薬で自殺未遂をした時に、バクスターは隣に住む医者に遊び人だと勘違いされたままこんな事を言われる。

「君の生活態度では、自殺騒ぎも当然だ。付けは必ず回ってくる。大人になれ。メンチュになれ、分かるか？」

（"Why don't you grow up, Baxter? Be a mensch. You know what that means?"）

「いゝえ」 （"I'm not sure."）

「人間になれってことだ」 （"A mensch : A human being!"）

世は嫌味になっていない。

その上彼は人のために悪役をかってでる男だ。その姿はギブアンドテイクで物事を考え、合理主義・物質主義にかぶれている部長や課長と対比されている。どちらに魅力を感じるかは観客次第だが、ワイルダーは少し哀れで冴えないけれども心の優しい男の方にハッピーエンドをプレゼントした。これは、人の心が合理主義と物質主義に打ち勝ったように見せるためだ。私は本作品を見終わって、人のあり方について考えさせられた。確かに、仕事を能率的に行うのはいい事だし、無駄な事は少ない方がいいかも知れない。だが、人の心が合理性や物質に支配されているのは本末転倒だと思うし、自分の良心を犠牲にしたり、人の不幸の上に自分の幸せを築くのは間違っているという感想を持った。合理主義や物質主義は人の生活を便利にするためのものであり、人の心を支配するためのものではないということをワイルダーは教えてくれた。

◆参考文献

・加藤幹郎

『映画視点のポリテイクス 古典的ハリウッド映画の戦い』筑摩書房 1996年

その後フランが部長と結婚する事になり、バクスターは部長に部屋の鍵を貸すように言われる。貸さないと降格処分にするぞと脅されて、鍵を渡したバクスターだが…。

「鍵が違う。これは（会社の役員用の）トイレの鍵だ」

「そうです、もう必要ありません」

「何を言う」

「医者に従い、メンチュになります。人間に」

（"Just following doctor's orders. I've decided to become a mensch. You know what that means? A human being."）

「待て」

「いろいろは結構」

こうしてバクスターは会社を辞めた。メンチュ（mensch）とは、ドイツ語で人間という意味だ。先に述べたように本作品の監督であるワイルダーはウィーン出身だ。

『アパートの鍵貸します』の中で、作品全体を通して流れているメッセージは「メンチュであれ」ではないだろうか。1950年代のアメリカは、TVを通して理想の家族像を国民に強要していた。ワイルダーは、その理想の姿から

飛び出してしまった人々を、作品の主要人物たちに体现させている。そして不倫や上司に媚を売って出世してゆく姿を描き、それを完全に悪としていない。これはワイルダーの、人間のだから一度や二度過ちを犯してしまうこともあるというメッセージだ。国民に理想像を押し付けたアメリカ社会を批判していると言える。また、物質的に豊かになったアメリカが、豊かさと引き換えに人を思いやる優しさを失ったと非難している。

最後の最後で部長の言いなりになって築いた地位を捨てた主人公は、そのご褒美であるかのように愛しのフランと結ばれる。私はラストシーンから、人は機械ではなく心を持っているから誰かの言いなりになる必要はないというワイルダーのメッセージを感じた。

おわりに

バクスターは不倫のカップルに部屋を貸しており、上司に媚を売ることによって出世してゆく。善人でないことは確かだが、全くの悪人ではない。自らの実力での出世ではないが、バクスター自身は出世できる事を無邪気に喜んでいるのも重要である。彼が純粹であるからこそ出

・北野圭介 著

『ハリウッド100年史講義 夢の工場から夢の王国へ』平凡社 2001年

・キャメロン・クロウ 著 宮本高晴 訳

『ワイルダーならどうする? ビリー・ワイルダーとキャメロン・クロウの対話』

キネマ旬報社 2001年

・笹田直人 堀真理子 外岡尚美 編著

『概説 アメリカ文化史』ミルネヴァ書房 2002年